

一宮寺家村といひ、別に宿のある區域を一宮村と稱するに至つたとある。能登名跡志に、『寺家村は氣多社の門前に有。神主百姓入交て百五十軒許有。此一村は氣多の社地にして、火を齋むこと正し。或は女の月の穢などは、家々の後に別家有て籠る也。又懐胎の女は、其産月に成れば、山に小屋あり、此に出て産す。若し背かば家にたより有。』と見える。

イチノミヤジケジヨウ 一ノ宮 寺家村 羽昨郡一宮寺家村は、越登賀三州志故墟考に、粟生七郎の館跡で、上杉謙信の爲に陥つたと記し、文化乙亥昌長の書上には青野七郎と記してゐる。謙信の居る所となつたといふことは何等の據がない。

イチノヤ 一ノ谷 鳳至郡小垣の内の小字。鶴川天満宮天文三年八月の棟札に一屋左近とあるは、この地の人であらう。

イチハシシヨウケン 市橋將監 慶長十二年前田利常に召出されて二百石を賜はり、其の子善右衛門のとき大聖寺藩の從臣となつた。

イチハシナミエ 市橋波江 明治二年六月大聖寺藩の質金製造即ちバトロン事件發覺と共に責任を負うて刑腹し、累を藩に及ぼさなかつた。因つて組頭井上唯輔・志村奎進・中監察司・河野喜平次が立會ひ、死体を塩漬として政府の沙汰を待つたが、藩は其の死を悼み、嗣子誠一郎に増祿して九十九俵一斗四升を興へた。

イチハシマサタダ 市橋政忠 通稱左衛門。大坂冬陣には第五隊の馬廻組頭であつた。知行二千八百石。寛永十四年に歿した。大乗寺の梵鐘は寛永八年その父政秀の二十三回に當

つて政忠の寄進したものである。後裔は断絶。イチバナザイケ 市場の在家 ↓ツルギノイチ 鶴來の市。

イチハラキタシロヒコジンジャ 機原北代比古神社 鳳至郡谷内に鎮座する。式内等舊社記に、『河原田郷大野村高洲山鎮座。故今稱鷲嶽八幡宮。式外之舊社也。』とあり、能登名跡志に、『又少し行けば鷲嶽といふあり。是は谷内村の内なり。海際の磯際に茂りたる大森あり。機原彦の神社立ち給ふ。則鷲嶽八幡宮と號す。本地大日如來。昔は兩部の大社なりしに、兵亂に今は神主までにて、四柳氏也。鷲嶽といふは、往古此所にて鳳至比古の神跡、鷲の悪鳥を矢にて退散ありしに、其羽に入幡の文字あり。是を勸請せし社也。又此の骸を取めしより輪島の鷲藏宮といふ由。委しくは縁起にあり。中比利家公御通りの時、此の宮の衆徒の内、石動山に興力せし者ありて、長刀にて御成敗ありしとて、往來に其所を長刀坂とてあり。』と見える。當社に承元元年三月の棟札とて機原北代比古神社六社大權

現、長谷部兵庫允廣連の文字があり、又勝應三年十月のものとして機原北代比古神社六社大明神、施主長谷部雅樂左衛門財政連の文字のあるものがあるが、共に疑はしい。

イチヒメジンジャ 市姫神社 金澤下近江町に鎮座する。初め石川郡大豆田にあつたが、その農民九郎兵衛、近江町の野兵衛と謀つて之を同町接待橋の附近に移し、次いで寛永中卯辰觀音院の境内に轉じ、明治十二年再び今の地に遷座したものであるといふ。

イチブカリ 一步坊 ↓ブカリ 步坊。イチベエツカ 市兵衛塚 白山の大汝臣の

南斜面にある石塚である。イチムラセイロク 市村清六 清六は朝鮮人で、同國陣の節捕虜となつて來り、前田利長に召出されて殺生御用を仰付られた。其の子十右衛門父の跡目を相続し、切米十三俵餘を賜はり、寛永二十年病死した。その子十右衛門相続し、御鷹匠に嗣して殺生御用を勤めたが、其の後小川七郎左衛門の門弟となつて火矢の術を學び、延寶二年に病死した。その子七兵衛は元祿の頃諸橋喜太夫の弟子となり、御能役者を勤めた。

イチヤヘキガンシユウ 一夜碧巖集 ↓ヘキガンシユウ 碧巖集。

イチラク 一樂 鹿島郡能登部の百姓。澤井氏。寛文七年四月長連頼の家に浦野事件の起つた時、十村役上野が處罰せられたので、その家屋及び跡高を拜領して十村となつたが、延寶元年役儀を免ぜられ、二年病死した。二代一樂襲職して正徳三年五月歿。三代一樂又襲職して享保六年五月歿。四代一樂は襲職したが、晩年の事は詳かでない。五代一樂は襲職せず。六代一樂は享和三年芹川村兵衛先組に引越十村となり、酒井村一樂と稱し、文政二年三月十村三十人が訓戒の爲入牢せしめられた時之と共に収容せられ、六月出牢して歸役し、七年二月歿。七代一樂は能登部下村一樂と稱し、山廻役となり、弘化元年歿。八代一樂亦山廻役に任ぜられた。

イチラクシユウ 一樂集 三卷一册。奥村尙寛の歌集で、寛政四年壬子彌生二十八日の自序があり、そのうちに尙寛が歌を青山知親に學んだことが記されてゐる。

イチリンボウ 一林坊 羽昨郡瀧谷妙成寺の塔頭。寛永十八年妙成寺十五代日條之を建立して退隱所に宛てたものであるが、今は存せぬ。

イチルイオアツケ 一類御預 ↓オアツケ御預。

イチレン 一蓮 白山記に『禪頂座主始一蓮君ヨリ唯佛ヲ四代、本ノ京人也。』と見えるから、白山寺の座主であつたと思はれるが詳傳を得ぬ。

イチキユウセン 市井友仙 元祿九年十二月新知百石を賜うて御茶堂頭となり、正徳三年歿した。その子友佐も亦後に友仙といひ、父の遺知十人扶持を受け、享保二十年五人扶持を加へ、元文五年新知百石を受け、寶曆十一年歿した。子孫友溪・英仙・明説亦御茶堂として藩に仕へた。

イツカ 一荷 酒二樽をいふ。萬治二年正月の御定書に、『歳暮御祝儀、自分知二萬石以上御小袖一つ、同一萬石以上一荷一種、同三千石以上御肴一種充可上事。』など、ある。

イツカイジ 一會寺 石川郡富樫庄會谷の内に經塚といふがあり、昔一會寺の遺址であると傳へる。一會寺は又一廻寺とも書かれる。

イツカンイン 一閑院 石川郡鶴來に在つた。寛永八年寶圓寺五代泰山雲逸は、芳春院夫人取立の長老で、鶴來の山林を拜領し之を建立した。明治五年金澤下百々木町に移つた。

イツキ 一揆 ↓コメソウドウ 米騒動。イツク 一矧 ↓シマノイツク 鳥野一矧。イツケイ 一景 ↓ツカタイツケイ 塚田